

高齢者の社会活動と生活満足度の関連

社会活動の4側面に着目した男女別の検討

オカモト ヒデアキ*
岡本 秀明*

目的 高齢者の社会活動の4側面と生活満足度との関連を男女別に検討した。

方法 都市部の高齢者(65~84歳)1,500人を対象に自記式調査票を用いた郵送調査を実施した。有効回答数771人のうち、生活満足度の項目などに無回答の者を除外したため、分析対象者は612人となった。測定は、生活満足度はLSIK、社会活動は個人活動、社会参加・奉仕活動、学習活動、仕事の4側面で捉えた社会活動指標を用いた。分析は、生活満足度を従属変数とする重回帰分析を男女別に行った。社会活動の4側面のうち、仕事の側面は仕事あり群となし群、それ以外の3側面は低位群、中位群、高位群の3群に分類した。分析の際、まず、独立変数を社会活動の各側面の活動低位群を参照カテゴリーとしたダミー変数とする分析を側面ごとに行った(Model 1)。次に、社会活動4側面のダミー変数を独立変数に同時投入して分析した(Model 2)。すべての重回帰分析で投入した調整変数は、年齢、配偶者の有無、暮らし向き、IADLであった。

結果 Model 1による分析の結果、個人活動の高位群は、男女とも低位群より生活満足度得点が高く、中位群と低位群の間に差はなかった。社会参加・奉仕活動は、男性には関連はみられなかった。女性の高位群は低位群より生活満足度得点が高く、中位群と低位群の間には差はなかった。学習活動および仕事は、男女とも生活満足度との関連はなかった。Model 2の分析の結果、男性においては生活満足度と関連が認められた社会活動の側面はなかった。女性は個人活動のみに関連がみられ、高位群および中位群は低位群より生活満足度得点が高かった。

結論 高齢者の社会活動と生活満足度との関連について、社会活動4側面を同時投入し、社会人口学的変数およびIADLを調整して分析した。その結果、女性では個人活動が活発な者ほど生活満足度得点が高かった。一方、男性では社会活動と生活満足度との関連はなかった。

Key words : 地域高齢者, 社会活動, 社会参加, 生活満足度, 横断研究

1 はじめに

高齢者の社会活動に関する支援は、要介護高齢者支援とともに高齢者保健福祉施策の主要な柱の1つとなっている。高齢者が充実した高齢期を過ごせるように、彼らが社会活動を行いやすい社会を実現していくことが求められる。

Rowe and Kahnは、幸福な老いの主要な構成要素の1つに社会活動や生産的(productive)な活動にかかわる生活をあげている¹⁾。幸福な老いと社会活動の関係は、幸福な老いを生活満足度などと操作的に定義し、活動理論²⁾や離脱理論³⁾を検証した研究、生活満足度の関連要因を検討した研究のなかで言及されてきた。Larsonは、幸福な老いの主観的

な指標の関連要因を検討した過去30年間の主要な研究をレビューし、社会活動との間に0.1~0.3程度の正の相関があるとしている⁴⁾。その後の生活満足度などの指標の関連要因を多変量解析により検討した研究のなかで、正の関連がみられた社会活動に相当する指標として、つきあいの機会(男性)や近所づきあい(女性)⁵⁾、ボランティア活動(男性)⁶⁾、インフォーマルな社会活動^{7,8)}、社会関係指標(親密さをともなう人間関係量)⁹⁾、社会活動(ボランティア、他者を訪問、クラブ等参加、電話でのおしゃべりの活動得点)¹⁰⁾が報告されている。

しかしながら、これらの研究の多くは、生活満足度の関連要因を検討する際に単なる要因の1つとして簡便な社会活動の項目を設定したにすぎない、社会活動のタイプ別の検討がされていない、男女別に検討されていない、という点のいずれかに該当する。したがって、社会活動に焦点をあてて生活満足

* 和洋女子大学生生活科学系
〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1
和洋女子大学生生活科学系 岡本秀明

度との関連を他の変数の影響を調整して詳細に検討した研究は少ないのが現状である。たとえば、Zimmerらは多くの先行研究の短所として、活動を1つの概念で捉えているために異なるタイプの活動が生活満足度などの指標に与える影響が示されていない点を指摘している¹⁰⁾。出村らは、主観的QOLの要因検討の際に性差を考慮する必要性を指摘している⁶⁾。

社会活動と生活満足度の関連を詳細に検討した研究が少ない理由の1つに、高齢者の社会活動や社会参加などの概念を定義して測定するのが困難なこと^{11~13)}が考えられる。高齢者の社会活動の先行研究を概観すると、その測定方法はさまざまである^{7,10,12~15)}。そのようななか、高齢者の社会活動を個人活動、社会参加・奉仕活動、学習活動、仕事の4側面で捉えた「社会活動指標」¹⁶⁾が開発された。これにより、研究結果の比較検討が可能になり、実証的な社会活動研究の発展が期待される。近年、社会活動の実態把握や関連要因の研究のなかで、この指標を使用または参考にするものがでてきている^{17~21)}。なお、社会活動の尺度として注目されるこの指標であるが、生活満足度との関連を検討した研究はほとんどみられないため、この関連を明らかにすることも求められよう。社会活動を4側面で捉えているこの指標を用いることにより、Zimmerらという異なるタイプの活動と生活満足度の関連を検討すること¹⁰⁾にも結びつく。

以上のような背景から、高齢者への社会活動支援が求められる今日、高齢者の社会活動と生活満足度の関連を詳細に検討した研究が必要であると考えられる。そこで本研究では、社会活動4側面と生活満足度の関連を男女別に明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

1. 調査の対象と方法

大阪市24区のうち無作為に8区を抽出し、大阪市選挙人名簿を用いて65~84歳の高齢者1,500人を無作為抽出した。2005年4月1日から5月10日にかけて自記式調査票を用いた郵送調査を実施し、771人(51.4%)から有効回答を得た。

調査の際に、協力ができない場合は回答せずによること、回答データは統計的処理を行い個人を特定しないこと、協力が得られる場合は調査票を無記名で返送を依頼したいことを協力依頼文書に示したため、本研究における倫理的な問題点はないと判断している。

2. 分析に使用した変数

1) 生活満足度

生活満足度は、生活満足度尺度K(LSIK)²²⁾を用いた。この尺度は9項目で構成され9点満点であり、得点が高いほど生活満足度が高いことを示す。

2) 社会活動

社会活動は、社会活動指標¹⁶⁾を若干変更したものをを用いた。この指標は、社会活動を個人活動(「近所づきあい」,「近くの友人・友達・親戚の訪問」,「国内旅行」,「スポーツや運動」などの10項目,0~10点),社会参加・奉仕活動(「町内会・自治会」,「老人会」,「趣味の会などの仲間うちの活動」,「ボランティア」などの6項目,0~6点),学習活動(「高齢者学級・高齢者大学」,「カルチャーセンター」,「市民講座・各種研修会・講演会」,「シルバー人材センター」の4項目,0~4点),仕事(「収入のある仕事」の1項目,0~1点)の4側面で捉えたものである。変更したのは個人活動の構成項目で、第1に、金らの研究²⁰⁾とほぼ同様に「お寺参り」を「友人や知人と食事(町のふれあい喫茶や食事会等も含む)」に変更した。独居や夫婦のみ世帯が増加している今日、家族以外の者との会食が個人活動として重要なこと²⁰⁾、調査対象地域ではふれあい型食事サービス等が実施されていたためであった。第2に、「レクリエーション」という用語は回答者が理解しにくい場合を考え、「個人的な娯楽や遊び」に変更した²¹⁾。各項目の活動参加程度は、最近(過去1年間)の参加頻度を高齢者の回答のしやすさも考慮して「週に3回以上」,「週に1~2回程度」,「月に1~2回程度」,「半年に2~3回程度」,「年に1~2回程度」,「まったくしていない」という6つの選択肢で尋ねた。そして、社会活動指標が示す該当項目数を活動得点とする方法¹⁶⁾に合致させるため、活動あり(「週に3回以上」~「年に1~2回程度」)に1点、活動なし(「まったくしていない」)に0点を付与して社会活動の側面ごとに単純加算した。

仕事(2値変数)以外の社会活動各側面の得点分布は、個人活動は高得点、社会参加・奉仕活動と学習活動は低得点の者の割合が高いという偏りがあり正規分布から外れていた。そのため、各側面の男女それぞれの得点分布を基準に「低位群」,「中位群」,「高位群」の3カテゴリーに三等分し、「低位群」を参照カテゴリーとする2つのダミー変数を作成した。

3) 調整変数

調整変数は、年齢、配偶者の有無(0=なし,1=あり),暮らし向き(1=大変苦しい~5=大変ゆとりがある),IADL(0=非自立項目あり,1=自立)

とした。IADLは、細川らの拡大ADL尺度²³⁾を構成するIADL項目群のうち、食事の用意は性差が大きいため除外し、日用品の買い物、預貯金の出し入れ、バスや電車の利用の3項目について尋ね、すべてひとりでできると回答した者を自立とした。

3. 分析方法

分析対象者は、有効回答が得られた771人のうち、年齢、性別、生活満足度の構成項目のいずれかに無回答の者は除外したため、612人（男性295人、女性317人）となった。

分析は生活満足度を従属変数とする重回帰分析を男女別に行うこととし、第1に、社会活動の各側面の変数を側面ごとに独立変数に投入した（Model 1）。第2に、社会活動4側面の変数を独立変数に同時投入した（Model 2）。調整変数は、いずれの分析においても、年齢、配偶者の有無、暮らし向き、IADLを投入した。

III 研究結果

1. 分析対象者の特性

分析対象者の特性は、表1に示したとおりである。各特性を男女間で比較したところ、基本的な特性のなかでは配偶者の有無に有意な違いがみられた。配偶者がいる者の割合は、男性は85.4%、女性48.4%と男性のほうが高かった。社会活動4側面においては仕事に有意な違いがみられ、仕事をしている者の割合は、男性は41.6%、女性の21.9%と男性のほうが高かった。生活満足度は男女間に有意差はみられなかった。

社会活動3側面それぞれを男女別に三等分したところ、3側面とも男女の得点分布が類似していた。そのため、各側面を「低位群」、「中位群」、「高位群」に分類する得点の基準は、表1に示したように結果的に男女とも同一となった。

2. 社会活動4側面と生活満足度の関連

重回帰分析のModel 1の分析結果は、以下のとおりであった。個人活動の高位群は、男女ともに低位群より生活満足度得点が有意に高かった。中位群と低位群の間には、男女とも有意な違いは認められなかった。社会参加・奉仕活動は、男性には生活満足度との有意な関連は認められなかった。女性においては、高位群は低位群よりも生活満足度得点が高い、中位群と低位群の間には有意な違いはなかった。学習活動および仕事は、男女ともに生活満足度との有意な関連はなかった（表2）。

社会活動4側面を同時投入したModel 2の分析の結果、男性では生活満足度との有意な関連が示された活動側面はみられなかった。女性においては個

表1 分析対象者の特性

	平均値±SD または人 (%)		検定
	男性(n=295)	女性(n=317)	
年齢			
平均値±SD	72.1±4.9	72.8±5.4	n.s.
65～69歳	105(35.6)	112(35.3)	
70～74歳	102(34.6)	86(27.1)	
75～79歳	55(18.6)	72(22.7)	
80～84歳	33(11.2)	47(14.8)	
配偶者			
あり	251(85.4)	151(48.4)	***
なし	43(14.6)	161(51.6)	
暮らし向き			
平均値±SD	2.8±0.9	2.9±0.9	n.s.
大変ゆとりがある	14(4.7)	12(3.8)	
ややゆとりがある	41(13.9)	48(15.1)	
ふつう	148(50.2)	181(57.1)	
やや苦しい	70(23.7)	52(16.4)	
大変苦しい	22(7.5)	24(7.6)	
IADL			
全項目自立	259(87.8)	279(88.0)	n.s.
非自立項目あり	36(12.2)	38(12.0)	
個人活動			
低位群 (0～6点)	105(38.7)	83(29.5)	n.s.
中位群 (7～8点)	83(30.6)	97(34.5)	
高位群 (9～10点)	83(30.6)	101(35.9)	
社会参加・奉仕活動			
低位群 (0点)	90(31.8)	78(26.7)	n.s.
中位群 (1～2点)	110(38.9)	122(41.8)	
高位群 (3～6点)	83(29.3)	92(31.5)	
学習活動			
低位群 (0点)	192(66.9)	182(62.5)	n.s.
中位群 (1点)	62(21.6)	61(21.0)	
高位群 (2～4点)	33(11.5)	48(16.5)	
仕事			
あり	121(41.6)	67(21.9)	***
なし	170(58.4)	239(78.1)	
生活満足度 (LSIK)			
平均値±SD	3.8±2.1	3.9±2.3	n.s.

注1：各項目で欠損値がある場合は合計数がnに満たない場合がある。

注2：検定は各特性の男女間の比較。年齢、暮らし向き、生活満足度はt検定、そのほかは χ^2 検定を用いた。

***: $P < .001$, **: $P < .01$, *: $P < .05$,

n.s.: 有意差なし

人活動のみに有意な関連がみられ、高位群および中位群は、低位群より生活満足度得点が高い（表3）。

なお、重回帰分析の結果すべてにおいて、VIF

表2 男女別の社会活動各側面と生活満足度の関連 (Model 1)

	男 性				女 性			
	β	β	β	β	β	β	β	β
年齢	-.043	-.052	-.059	-.042	-.097	-.104	-.141*	-.092
配偶者 (0=なし)	.201***	.208***	.213***	.202***	.027	.044	.043	.052
暮らし向き	.314***	.333***	.347***	.323***	.358***	.398***	.406***	.406***
IADL (0=非自立項目あり)	.146*	.169**	.178**	.173**	.177**	.231***	.248***	.252***
個人活動								
低位群 vs 中位群	.009				.085			
低位群 vs 高位群	.133*				.281***			
社会参加・奉仕活動								
低位群 vs 中位群		-.006				-.024		
低位群 vs 高位群		.106				.147*		
学習活動								
低位群 vs 中位群			.033				-.020	
低位群 vs 高位群			-.001				.058	
仕事 (0=なし)				.089				.095
Adjusted R ²	.216***	.235***	.217***	.219***	.288***	.263***	.248***	.253***

*** : $P < .001$, ** : $P < .01$, * : $P < .05$

表3 男女別の社会活動と生活満足度の関連 (Model 2)

	男 性	女 性
	β	β
年齢	-.012	-.090
配偶者 (0=なし)	.174**	.015
暮らし向き	.291***	.349***
IADL (0=非自立項目あり)	.151*	.165**
個人活動		
低位群 vs 中位群	.025	.155*
低位群 vs 高位群	.113	.312***
社会参加・奉仕活動		
低位群 vs 中位群	-.027	-.094
低位群 vs 高位群	.063	.024
学習活動		
低位群 vs 中位群	-.012	-.110
低位群 vs 高位群	-.033	-.053
仕事 (0=なし)	.079	.066
Adjusted R ²	.217***	.299***

*** : $P < .001$, ** : $P < .01$, * : $P < .05$

(variance inflation factor) の値は最も高いものでも男性2.44, 女性2.81であり, 変数間に多重共線性の問題はないことが確認された²⁴⁾。

また, 重回帰モデルの残差について, それぞれ, 標準化予測値と標準化残差をプロットした図を作成

して確認したところ, 特定の変動傾向はみられなかった。また, 標準化残差は正規確率プロットにより確認したところ, ほぼ線上に並んでいた。したがって, それぞれの重回帰式の妥当性に特に問題はないと判断している。

IV 考 察

まず, Model 1 の分析結果の考察を示す。

生活満足度と関連が認められた社会活動の側面は, 個人活動と社会参加・奉仕活動のみであった。そのなかでも, 男女ともに関連を示したのは個人活動のみであった。主な理由として, 個人活動を構成する10項目のうち, 生活満足度の上昇に寄与しやすいと思われる他者との関係を示す項目が3項目(近所づきあい, 近く・遠方の友人などの訪問)を占めていたことが考えられる。他者との関係(社会関係)は, 老年期の社会適応に影響する最大の社会的要因であり²⁵⁾, 概して高齢期の主観的幸福感などの指標の強い規定要因とされている²⁶⁾。たとえば, 友人などの他者との関係は, 他の変数を調整しても生活満足度などの指標との正の関連が報告されている^{5,6,8,9,27)}。

他者との関係以外にも, 活動該当者の生活満足度を比較的大きく上昇させる項目の存在が考えられる。Lawton は, 余暇活動と肯定的な感情との正の関連が他の変数を調整しても認められたとしている²⁸⁾。その研究では, 余暇活動を構成する16項目それぞれ

と肯定的な感情との2変数間の相関も示されており、そのなかで、たとえば趣味、外食の項目は有意な正の相関を示している²⁸⁾。これら2項目は本研究の個人活動構成項目に含まれており、活動該当者の生活満足度を高めた可能性がある。

社会参加・奉仕活動と生活満足度の有意な関連は、女性のみ認められた。今日の女性高齢者は専業主婦であった者が多く、近所づきあいや子どもを通じた地域とのかかわりが日常生活に組み込まれてきた者が多い¹⁷⁾。そのため、女性は男性よりも高齢期以前から地域における社会参加・奉仕活動に馴染んでおり、活動から生活満足度を上昇させる効果を得やすいことが考えられる。一方で男性高齢者は、定年退職後に初めて地域活動に参加する者の割合が高く、活動に馴染めなかったり自分自身が望むような活動参加に至るまでに時間を要したりすることが考えられる²⁹⁾。そのため、活動参加が生活満足度の上昇に結びつかない者もある程度存在し、男性には関連が認められなかった可能性がある。女性が高齢期に行っている社会参加・奉仕活動は、高齢期以前に参加した活動のなかで継続したい活動が選択されて残ったものが多いことが考えられる。そうであれば、活動参加が生活満足度の上昇に寄与しやすいであろう。

以下に、Model 2の分析結果の考察を示す。

女性の分析では、個人活動のみが有意な正の関連を示した。Model 1でみられた社会参加・奉仕活動の有意な正の関連は、他の3側面の活動の影響を取り除くと消失した。Model 1の分析で生活満足度と有意な関連を示したのは個人活動と社会参加・奉仕活動であったこと、これら2つの活動側面の順位相関係数は比較的高かったことから ($\rho = .572, P < .001$)、社会参加・奉仕活動の有意な関連は主に個人活動の影響を取り除くことで消失したと考えられる。

社会活動4側面のなかで個人活動が生活満足度を高めていたことについて、とくに社会参加・奉仕活動と比較してみると、第1に、個人活動は個人が行いたいことが活動に反映されやすく、望まないような要素が入りにくいいため、活動参加が生活満足度の上昇に結びつきやすいと思われる。それに対し、社会参加・奉仕活動はグループや集団で行う活動が多いため、活動参加自体は望んだものであっても、その活動過程において、人間関係がうまくいかなかったり望むような活動をしにくいなどの生活満足度の上昇を阻害する要素が発生しやすいことが考えられる。第2に、本研究の社会参加・奉仕活動の構成項目に相当するような活動のなかでも、たとえば、地

域奉仕活動と自己完結型の活動⁷⁾、居住地域に規定される自動加入型と自主加入型の活動³⁰⁾で生活満足度などの指標との関連の有無が異なるとの報告がある。本研究の社会参加・奉仕活動は、これらの異なる型の活動を含んで構成された活動概念であるために生活満足度との関連があらわれにくかったことが考えられる。

異なるタイプの社会活動を調整変数とともに同時投入して検討した先行研究をみると、男女別の分析ではないが、インフォーマルな活動(友人・隣人・親族との活動)は正の関連がみられたがフォーマルな活動(組織化された活動への参加)には関連はない(社会関係変数を未投入のモデルによる)⁸⁾、インフォーマルな活動は正の関連が示されたがフォーマルな活動(集団的な活動参加)には負の関連がある²⁷⁾という報告がある。これらの研究のインフォーマルな活動とフォーマルな活動は、それぞれ本研究の個人活動と社会参加・奉仕活動に比較的近い概念といえる。そのため、本研究のModel 2の分析で社会参加・奉仕活動ではなくて個人活動に正の関連があったという結果は、これらの先行研究の知見とほぼ同様であったといえる。また、先述したように、個人活動の構成項目は生活満足度の上昇に寄与しやすいと思われる項目が比較的多いこと、先行研究^{6~8,27,31,32)}をみると社会参加・奉仕活動の概念や構成項目に相当する変数と生活満足度は常に正の関連を示すわけではないことを考慮すると、Model 1の分析で社会参加・奉仕活動にみられていた正の関連が個人活動の影響を受けて消失することは十分に考えられるといえる。

男性は、Model 1でみられた個人活動の弱い関連($\beta = .133$)が消失し、生活満足度と関連がある活動側面はなかった。個人活動と社会参加・奉仕活動および仕事の二変数間の順位相関係数をみたところ、それぞれに有意な相関がみられ($\rho = .580, P < .001$; $\rho = .197, P < .01$)、かつ社会参加・奉仕活動および仕事は生活満足度との二変数間においてそれぞれ正の相関を示していた($\rho = .234, P < .001$; $\rho = .233, P < .001$)。このことから、Model 1の分析で有意な関連を示していた個人活動は、Model 2の分析では、主に社会参加・奉仕活動と仕事のいずれか、あるいは双方の影響を受け、その関連が消失したと推察される。そのほかに、男性が個人活動を行うことにより生活満足度を上昇させるような要素を得ているかどうかは個人差が大きいため、女性のように個人活動が活発な者の生活満足度が高い傾向にあるという結果が示されないのかもしれない。そうであれば、とくに男性においては、活動の質ではなくて単

なる活動参加の程度を把握した指標では、生活満足度との関連が示されにくい可能性が考えられる。

学習活動と仕事は、男女とも生活満足度と関連がなかった。学習活動による肯定的な影響は、生活満足度尺度では把握しにくい可能性が考えられる。たとえば、Menecは高齢期の活動と幸福な老いの研究のなかで、活動から得られるものは非常に特化されたものであるため、全体的な生活の満足を測定する尺度では捉えきれない可能性を指摘している³³⁾。この指摘は学習活動に限定したものではないが、学習活動の肯定的影響の把握にあてはめて考えると、生活の全体を捉えるような満足度ではなくて、学習や知的好奇心の充足の満足度を把握するような学習活動に特化した尺度でないと敏感に捉えきれない可能性が考えられる。

仕事と生活満足度などの指標との関連について、男女別の分析ではないが調整変数の投入後も正の関連あり³⁴⁾、二変数間の分析では女性のみ正の関連があったが他の変数の調整後は男女とも関連はないなどの報告がある⁵⁾。Gallらは、退職の影響に関するこれまでの知見について、負の関連がある場合やない場合に加え、肯定的な影響を与えるという知見も複数あるとまとめている³⁵⁾。このように知見が一致しない理由として、健康状態、経済状況、退職から調査時期までの期間の長さ、退職後の生活に適応する資源の保有状況などの複雑さがあること、健康や収入などの変数を統計学的に調整することにより仕事の関連の程度が減じられるなどの指摘がある^{4,35)}。本研究の仕事と生活満足度との二変数間の順位相関係数を算出すると、男女とも有意な正の相関がみられたため(男性： $\rho = .233$; $P < .001$; 女性： $\rho = .151$; $P < .01$)、主に暮らし向きを調整したことにより仕事と生活満足度の有意な関連が示されなかったと推察される。仕事により収入を得て暮らし向きにゆとりが生まれるとの解釈が一般的といえるため²¹⁾、仕事は有意な関連がなかったといえる。

V おわりに

本研究は、高齢者の社会活動4側面と生活満足度の関連を男女別に検討したものである。年齢、配偶者の有無、暮らし向き、IADLを調整して活動側面に分析した結果、個人活動は男女ともに、社会参加・奉仕活動は女性のみ生活満足度との正の関連が確認された。学習活動と仕事は関連が認められなかった。社会活動4側面を同時投入して分析した結果、男性は生活満足度との関連がある活動側面はなく、女性は個人活動のみが正の関連がみられた。

以下に、本研究の限界や課題を示す。第1に、本

研究は1つの地域の高齢者から得たデータによる結果であるため、他の地域で追試を行い、本研究結果の再現性を確認する必要がある。第2に、本研究は横断分析に基づいたものであるため、縦断研究による結果の確認が求められる。第3に、調査対象者1,500人のうち、有効回答者数は771人(51.4%)、分析対象者数は612人(40.8%)であったため、分析対象者の特性が偏っていた可能性があることは否めない。郵送調査における督促状による効果の研究の知見³⁶⁾を考慮すると、本研究の分析対象者は、抑うつ傾向の強い者や地域・社会貢献活動への参加意欲を持たない者の割合が実態よりも低い可能性がある。そうであれば、実態よりも社会活動に前向きな傾向のある者の割合が増加し、分析対象者集団がより均質化し、社会活動と生活満足度の関連があらわれにくくなっていたかもしれない。第4に、社会活動の効果を生活満足度尺度で敏感に把握できない可能性がある。生活の全体的な満足度を捉える尺度では活動の効果を捉えきれないかもしれないとする指摘もあるため³³⁾、社会活動の効果を把握しやすい尺度の使用または作成を検討する必要もあろう。

本調査の回答に協力をしていただいた大阪市の65～84歳の皆様方に心から感謝を申し上げます。また、分析について丁寧な助言をしていただいた飯淵貞明先生(和洋女子大学生生活科学系教授)に深く感謝いたします。

(受付 2007. 5. 24)
(採用 2008. 5. 2)

文 献

- 1) Rowe JW, Kahn RL. Successful aging. *The Gerontologist* 1997; 37(4): 433-440.
- 2) Lemon BW, Bengtson VL, Peterson JA. An exploration of the activity theory of aging: Activity types and life satisfaction among in-movers to a retirement community. *Journal of Gerontology* 1972; 27(4): 511-523.
- 3) Cumming E, Henry WE. *Growing old: The process of disengagement*. New York: Basic Books, 1961.
- 4) Larson R. Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology* 1978; 33(1): 109-125.
- 5) 長田 篤, 山縣然太郎, 中村和彦, 他. 地域後期高齢者の主観的幸福感とその関連要因の性差. *日本老年医学会雑誌* 1999; 36(12): 868-873.
- 6) 出村慎一, 野田政弘, 南 雅樹, 他. 在宅高齢者における生活満足度に関する要因. *日本公衆衛生雑誌* 2001; 48(5): 356-366.
- 7) 香川幸次郎, 中嶋和夫, 芳賀 博. 高齢者の社会活動と生活満足度の関係. *日本保健福祉学会誌* 1998; 5(1): 71-77.
- 8) Litwin H. Activity, social network and well-being: An

- empirical examination. *Canadian Journal on Aging* 2000; 19(3): 343-362.
- 9) 古谷野亘. モラルに対する社会的活動の影響: 活動理論と離脱理論の検証. *社会老年学* 1983; 17号: 36-49.
- 10) Zimmer Z, Hickey T, Searle MS. Activity participation and well-being among older people with arthritis. *The Gerontologist* 1995; 35(4): 463-471.
- 11) 奥山正司. 高齢者の社会参加とコミュニティづくり. *社会老年学* 1986; 24号: 67-82.
- 12) 松岡英子. 高齢者の社会参加とその関連要因. *老年社会科学* 1992; 14: 15-23.
- 13) Graney MJ. Social participation roles. Mangen DJ, Peterson WA, eds. *Research Instruments in Social Gerontology: Social Roles and Social Participation (volume 2)*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1982; 9-42.
- 14) Graney MJ. Happiness and social participation in aging. *Journal of Gerontology* 1975; 30(6): 701-706.
- 15) Bukov A, Maas I, Lampert T. Social participation in very old age: Cross-sectional and longitudinal findings from BASE. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences* 2002; 57B(6): P510-P517.
- 16) 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 他. 高齢者における社会活動状況の指標の開発. *日本公衆衛生雑誌* 1997; 44(10): 760-768.
- 17) 佐藤秀紀, 鈴木幸雄, 松川敏道. 地域高齢者の社会活動への参加状況. *日本の地域福祉* 2000; 14: 81-89.
- 18) 佐藤秀紀, 佐藤秀一, 山下弘二, 他. 地域在宅高齢者の社会活動に関連する要因. *厚生*の指標 2001; 48(11): 12-21.
- 19) 高橋美保子, 柴崎智美, 永井正規. 老人クラブ会員の社会活動レベルの現状. *日本公衆衛生雑誌* 2003; 50(10): 970-979.
- 20) 金貞任, 新開省二, 熊谷修, 他. 地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因: 埼玉県鳩山町の調査から. *日本公衆衛生雑誌* 2004; 51(5): 322-334.
- 21) 岡本秀明, 岡田進一, 白澤政和. 大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因: 身体, 心理, 社会・環境的要因から. *日本公衆衛生雑誌* 2006; 53(7): 504-515.
- 22) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博, 他. 生活満足度尺度の構造: 因子構造の不変性. *老年社会科学* 1990; 12: 102-116.
- 23) 細川徹, 坪野吉孝, 辻一郎, 他. 拡大ADL尺度による機能的状態の評価: (1)地域高齢者. *リハビリテーション医学* 1994; 31(6): 399-408.
- 24) Chatterjee S, Price B. *Regression Analysis by Example*. 2nd ed. New York: John Wiley & Sons, 1991; 186-193.
- 25) 古谷野亘. 老年期の社会適応に影響を及ぼす社会的要因: 社会関係を中心として. *老年精神医学雑誌* 1998; 9(4): 372-377.
- 26) George LK. Perceived quality of life. Binstock RH, George LK, eds. *Handbook of Aging and the Social Sciences*. 6th ed. San Diego: Academic Press, 2006; 320-336.
- 27) Longino CF, Kart CS. Explicating activity theory: A formal replication. *Journal of Gerontology* 1982; 37(6): 713-722.
- 28) Lawton MP. Personality and affective correlates of leisure activity participation by older people. *Journal of Leisure Research* 1994; 26(2): 138-157.
- 29) 岸田宏司. 人間関係を作り直す. ニッセイ基礎研究所, 編. 定年前・定年後: 新たな挑戦「仕事・家庭・社会」. 東京: 朝日新聞社, 2007; 123-133.
- 30) 野辺政雄. 地方都市に住む高齢女性の主観的幸福感. *理論と方法* 1999; 14(1): 105-123.
- 31) Hoyt DR, Kaiser MA, Peters GR, et al. Life satisfaction and activity theory: A multidimensional approach. *Journal of Gerontology* 1980; 35(6): 935-941.
- 32) 福田寿生, 木田和幸, 木村有子, 他. 地方都市における65歳以上住民の主観的幸福感と抑うつ状態について. *日本公衆衛生雑誌* 2002; 49(2): 97-105.
- 33) Menec VH. The relation between everyday activities and successful aging: A 6-year longitudinal study. *Journal of Gerontology: Social Sciences* 2003; 58B(2): S74-S82.
- 34) 岡本秀明, 岡田進一, 白澤政和. 農村部における高齢者の社会活動と生活満足度との関連: 社会活動に対する参加意向に着目して. *社会福祉学* 2005; 46(1): 63-73.
- 35) Gall TL, Evans DR, Howard J. The retirement adjustment process: Changes in the well-being of male retirees across time. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences* 1997; 52B(3): P110-P117.
- 36) 小林江里香, 深谷太郎. 前期高齢者の郵送調査における督促状の効果. *老年社会科学* 2007; 29(1): 65-74.

Effects of social activities on life satisfaction among the elderly: Four aspects in men and women

Hideaki OKAMOTO*

Key words : elderly people in communities, social activities, social participation, life satisfaction, cross-sectional study

Objective The current study was performed to examine relationships between different aspects of social activities and life satisfaction among the elderly. This issue was investigated in men and women separately.

Methods Data for 612 older adults aged 65 to 84 years were obtained from a mail survey in an urban area. Life satisfaction was measured using the LSIK and social activities were assessed by asking respondents their degree of participation in each type of interaction. The focus was on four aspects: personal activities, socially-related activities, learning activities, and job activity. In order to examine relationships between different aspects of social activities and life satisfaction, the author used multiple regression analyses with the four types of social activity level as independent variables. All except job activity were categorized as lower, middle and higher levels, and work was categorized as low and high. Two models of multiple regression were employed. First, each of the four aspects of social activity was entered as an independent variable (Model 1); second, four aspects of social activity were entered as independent variables simultaneously (Model 2). The analyses were conducted separately for men and women, controlling for age, marital status, subjective economic status and IADL (instrumental activities of daily living).

Results (1) The results of the multiple regression analyses (Model 1) were as follows: for both men and women, personal activities were positively associated with life satisfaction. For women, socially-related activities were also positively related to life satisfaction. For both men and women, learning activities and job activity exhibited statistically nonsignificant relationships with life satisfaction.

(2) With Model 2, the results were as follows: among men, none of the aspects of social activity was significantly associated with life satisfaction. Among women, only personal activities were positively associated with life satisfaction.

Conclusion When all other aspects of social activity, sociodemographic and IADL factors were controlled, older women with higher levels of engagement in personal activities had greater life satisfaction, whereas among men, none of the aspects of social activity was significantly related to life satisfaction.

* Faculty of Life Science, Wayo Women's University